

# ニジェール支所便り

## 9月号

【編集長】小林支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni\_oso\_rep@jica.go.jp

### 小林支所長の着任挨拶

Ina kuana! 皆さん、こんにちは。8月に着任いたしました小林です。支所長不在が長引きご心配をおかけし、申し訳ありません。ニジェールは2011年ごろ、協力隊員退避の直前に出張して以来、二度目。その時、町で出会った物売りがとても親切で、それ以来赴任を希望していました。まさか治安がこんなに崩れるとは思ってなかったので、驚いている面もありますが。これまでは、鉱工業開発調査部(今の産業開発調査部)、タンザニア事務所、アフリカ部、評価部、協力隊事務局と渡り歩き、これまでは東アフリカを中心にインド洋岸沿いの諸国での経験を積んでまいりました。今回は南スーダン事務所からの横滑りの赴任です。やっと建国4年を迎えた南スーダンに比べると、ニアメの方がインフラを含め整っているのですが、独立後50年以上ということを見ると、この国が歩んできた道のりがいかに険しかったのかということを感じます。しかし、その環境の中で(本人たちはそうは思っていないでしょうけれども)忍耐強く、地道に暮らしを紡いでいるニジェールの人々にはやはり好感を抱きますし、また、皆さんもそうしたところに惹かれ、長らくニジェールラブを貫いておられるのだらうと推察しています。最近、「ニジェールには何もない、けれど平和があるというのがニジェールだった。しかし、今は平和もない」という言葉を聞くようになりました。しかしそうでしょうか？ 外的要因としての平和は失われていっています。しかし、ニジェールの人々の心の中にある平和は失われていない、と着任以来感じています。

現実的には事業は外的治安状況に多大な影響を受けざるを得ません。が、内的な平安を高められるよう、人々の心に寄り添う協力を展開できるよう、微力を尽くしたいと思っておりますので、ぜひご支援・ご協力をお願いいたします。

(ニジェール支所長 小林知樹)

### プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

#### ■■■サヘル地域における貯水池の有効活用と自律的コミュニティ開発プロジェクト(VRACS)■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/001/index.html>

#### ニアメモデルサイトのFFS進捗

VRACSではFFS(Farmer Field Schools)のモデルサイトとして、ニアメのSaga地区及びTondi Koirey地区の2つのサイトでFFSを実施しています。ここではSaga地区の進捗状況を紹介します。

Saga地区はニアメ市中心より南に約10km離れた、ニジェール川沿いに位置しています。グループは男性25名、女性7名の合計32名で、これを3つの男性サブグループと1つの女性サブグループに分けて活動を行っています。学習テーマ

は2つあり「トマト栽培における誘引方法の比較」と、「カボチャ栽培における病害虫処理方法」としています。このうちトマト栽培に関して、6月18日に苗床を設置し、筋蒔きにて播種を行いました。しかし、2週間が過ぎても発芽しなかったため、FFSのセッションでその原因に関するディスカッションがされました。ここでは、発芽しなかった原因を①苗床を日当たりのよい場所に設置したのだが、播種後の一週間以上は、日差しが強く暑い日が続いたため、土壌が乾燥しやすかった、②筋蒔きにて播種をしたが、種を深植えにしすぎた、とメンバーは推察しました。そして、①の対策として、「木々の下で、陽が適度に差すような場所に、苗床を設置する」。②に対しては、「播種を深植えにしない」、もしくは「播種しても土を被せない」という提案が出ました。そして7月3日にこれらを踏まえて再播種をした結果、翌週には無事に発芽をしました。しかし、②における「播種をしても土を被せない」を、試した部分のみ、発芽率が悪かったようです。このことからグループは「トマトの苗を作る際、苗床は乾燥しないように適度に陽が差す木陰を選び、播種は深植えにならないように気をつける」と結論付けました。

以上のようにグループは予期せぬ問題に直面しましたが、普及員、メンバー間で話し合いを行って、適切な対策を立て、解決に導くことができました。これはFFSの実施によって、グループは問題に対処する能力が向上したと言えます。私はFFSを通じてメンバーが上達していく姿を見て、手応えを感じています。今後もメンバーが様々な事を学べるよう、支援していきます。

(業務調整/農業普及補助 町慶彦)



Saga 地区のディスカッションの様子



トマトの種を播いてから一週間後の様子

## トピッカーニジェールのタマネギ



本プロジェクト（VRACS）は2012年の開始当初から2013年1月まで、対象地域の州の一つである、マラディ州のマラディ市にプロジェクト事務所を構え、業務を遂行していました。当時、ニアメまでは、車で往復しており、いつもマラディ州のガルミ市を抜ける時に、玉葱を満載したトラックを目にしたものです。ガルミ市は、Violet de Galmiという地名が名前になっている玉葱の生産地です。Violet de Galmiは、この地で開発されたものです。私は、30年前にセネガルでの調査で初めて目にしました。今回は、ニジェールの玉ねぎについて、まとめてみました。

### 1. ニジェールにおける玉葱の重要性

ニジェールはタマネギ生産量において、西アフリカの国々で、2番目を占めており、その輸出量においては1番である（生産量が1番多いのはナイジェリア）。生産量は、170,000トン（1990年）、500,000トン（2010年）と20年間で、約3倍に増えている。また、ニジェールのタマネギの輸出量は、農産物の輸出の65%を占めており、主に近隣国への輸出となっている。タマネギ生産は、乾季における現金収入の柱となっており、特にViolet de Galmi種は、その味及び品質の点で有名である。ニジェールのタマネギにかかわっている人は百万人を超え、ニジェールの経済に大きく貢献しており、その経済効果は、2012年において220億F.CFAと言われている。

### 2. タマネギの生産

ニジェールでは、全ての州でタマネギ栽培を行っている。タマネギの収穫量は、Violet de Galmi種で50トン/haである。タマネギ栽培は、基本的に乾季に行うことから、苗場への播種は10月下旬に行い、11月半ばに圃場に移植する。従って、3月及び4月に流通することになる。

### 3. タマネギの流通

ニジェールのタマネギの流通システムの殆どは正式なものではなく、ニジェール政府は公的に殆ど介入していない。タマネギの流通については、商人たちの協定による自己管理がその大分を占め、お互いの信頼関係に基づいている。必要であれば、種々の問題（タマネギ生産の村から小売商及び消費者のいる町までの間に起こる全ての問題）を克服するため、官吏と一緒に解決する。

タマネギの輸出先の国に住むニジェール人は、ニジェールにおけるタマネギベルトの主要な市場と密接な関係を保っている。外国の商人は、一般的にいつも同じ主要な仲買人達に頼っている。この流通網は閉鎖的であり、彼なしでは商売が成り立たないような影響力のある仲介人との絆によっている。このような仲介人は、地域における需要の変化及び値の動きについての情報網を持っている。また、ニジェールにおいて一般的な上記のような伝統的な流通システムに対し、タマネギの生産から流通までにかかわっているそれなりの規模を持った企業（ASI-Wankoye, SAFIE など）もある。これらの企業は、近代的な市場情報システムを利用し、生産者との契約栽培及び直接管理栽培にかかわっており、近代的な貯蔵庫、袋詰め、ラベリング及び運送に投資している。彼らはインターネットを利用し、新しい市場及び新しいパートナーの開拓を行っている。



#### 4. 種々の阻害要因

ニジェールで生産されているタマネギには、いくつかの品種があり、その中でも Violet de Galmi は中心的な品種である。しかし、最近徐々に、品種が混ざった純粋でないものが認められるようになってきた。これにより、消費者が欲しがると多品種の市場への提供が難しくなっている。これに対し試験場では、これらの疑義を払拭するため、品種の特定及び保証原種子の生産を進めている。また、タマネギの収穫時期は3月から4月になることから、11月から1月にかけて、ニジェールのみならず西アフリカ諸国では、毎年タマネギが不足することになる。11月から1月にタマネギを確保するためには、5月から10月にかけてタマネギを保存する必要があるが、その時期は雨季のため品質が劣化し、保存するのは難しい。また、10月にタマネギを流通させるため、雨季に栽培をする可能性については、試験場レベルで研究中である。

ニジェールで生産されているタマネギの、80%から95%は輸出に向けられているにもかかわらず、タマネギについての調査研究機関は存在しない。ニジェールにおけるタマネギの経済的重要性を考えた時、このような機関の創設が望まれる。

#### 5. タマネギの貯蔵

現在一般的なタマネギの貯蔵庫は、下記の写真のようなものである。



Gourgoutoulou (Tahoua 州) 右は内部の状況

通風が悪く、貯蔵したタマネギの半数以上、ひどい場合は70%程度が傷んでしまう。

(総括/農村開発 仲田 茂)

### ■■みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)■■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/002/index.html>

#### みんなの学校プロジェクト8月の主な活動

今月のプロジェクトの主な活動は、以下の通りです。

1. 中等 COGES モニタリング監督官会議(ニアメ、ドッソ)を開催(8月5日、7日)

同会議は、去年よりニアメとドッソで試行している中等 COGES モデルのモニタリングに関する活動のひとつで、今回の会

議ではパイロット校 COGES の機能度、卒業試験の結果などについての情報が共有、分析されました。

## 2. ガーナ、マダガスカル、ニジェールの経験共有セミナー(8月31日～9月4日)準備

今月末に予定されている同セミナーの準備を行いました。準備の内容は、ガーナ、マダガスカルからの参加者受け入れのロジ面と、プログラムの確定、準備などのサブの用意が同時になされています。

## 3. 質のミニマムパッケージと補助金モデルの統合モデル普及のための働きかけ

プロジェクト第3フェーズで試行してきた住民参加を通じた質の改善に係る2つのモデルで、当プロジェクト開発の補助金モデルは GPE(教育のためのグローバルパートナーシップ) 資金による教育省のプロジェクトの中で 1000 校への適用が決定していますが、効果の最大化をめざし、このモデルに質のミニマムパッケージ(校外学習+算数ドリル)を統合したモデルの普及のための働きかけを関係者に行っています。

## 4. CGDES モニタリング体制の国家承認ワークショップ(8月20日)

みんなの学校が試行、機能化してきたモニタリング体制の国家承認のためのワークショップです。内容は、現在のモニタリング体制についての紹介、その外部評価の調査結果の発表を受け、参加者が議論を行います。通常のワークショップでは、「…以上のような CGDES モニタリング体制とすべし」といった提言を出して終わりますが、今回は、**CGDES モニタリング体制の制度化に係る省令案作成、可決まで行う見込み**です。この省令案には、モニタリングの具体的な活動も規定されており、省令が正式に発布されれば、今後の調整部からのモニタリング政府予算獲得が有利になり、モニタリング体制の維持への貢献が期待されます。

\*学校運営委員会の略語は、小学校で CGDES、中学校では COGES です。

以上が、8月の活動及び活動見込みですが、最後に今回承認ワークショップを行うニジェールのモニタリング体制についてご説明します。

活動の紹介の中で、現在の機能しているモニタリグ体制を承認する形になっていますが、いったいどのように機能しているのでしょうか。例えば、「過去4年間の平均で、学校活動計画とその総括表の回収率がそれぞれ90%以上」というデータがあります。このデータは、広大なニジェールの国土に点在するニジェールの17000の小学校の9割以上のCGDESから、毎年、住民総会で決定承認、評価された活動計画や総括表が、モニタリングの仕組みをそれぞれの段階で、共有、総括されながら上に上がっていき、最後に中央レベルまで届いていることを示しています。9割以上の回収率は普通に考えてもいい数字ですが、ニジェールの交通や通信の事情を想像すれば、なおさらモニタリング/支援体制の機能度が高レベルだということがわかりになると思います。そして、この機能するモニタリング/支援体制が、過去4年間の活動実施平均動員額が日本円で、4億円を超えるようなCGDESの機能性を支えているのです。

今でこそ堅固なCGDESモニタリング/支援体制といえますが、ここに至るまでには長い道のりがありました。今回は、この稿を借りて、2004年のみんなの学校プロジェクト開始以来の試行錯誤で、どのようにモニタリング/支援体制の確立まで至ったのか、その経緯についてご説明したいと思います。

### モニタリング/支援体制の確立ということについて

モニタリング/支援体制の確立は、教育分野に限らず、さまざまな分野でその必要性について語られ、その永続化が成果のひとつになっているプロジェクトも多いと思います。みんなの学校プロジェクトも11年前に開始した当初から、モニタリング/支援体制の確立が成果の一つでした。

当時ニジェールが考えていた全国のCGDES(当時8000)を管轄するモニタリング/支援体制は、中央にCGDES推進室、各州にCGDESの担当官が1人(全国で8名)という簡素なものでした。その後、県に一人ずつ、全体で50名程度の行政官(元教員)がCGDES監督官に任命されましたが、具体的に何をするのか指示されず、各学校へ行く移動

手段もなく、地方の教育事務所にただ座っているか、兼務している仕事をしていました。これが、2004年にプロジェクトが始まった時の状態でした。

プロジェクト開始当初、対象であったタウア州(2004年小学校数800校、毎年100校程度増加する)にも、モニタリング/支援要員として、州に1人、県レベル9名CGDESを担当する行政官が任命されていましたが、彼らは名目だけのCGDES担当官でした。

この状況からモニタリング/支援体制確立を目指し、プロジェクトがまず行ったことは、CGDES担当官のバイクを供与、月に1度、彼らが集まるCGDESモニタリング担当官会議でモニタリング/支援の仕方やコミュニティー参加についての能力強化でした。プロジェクトは一生懸命に取り組みましたが、残念ながら能力強化は遅延として進みませんでした。それは、彼らは教員あがりの行政官であり、CGDESのモニタリング/支援、コミュニティーへの対処の仕方などに関しては素人で、CGDES担当官としてのモチベーションも低いものだったからです。そんな彼らにも次第に変わり始めます。まず、最初の変化の機会は、CGDES担当官をCGDES、住民の能力強化の講師として養成し、実際に講師をもらった時にやってきました。この機会に、「学校運営の仕組み」や「プロジェクトのアプローチ」に関する彼らの理解が格段に進みました。次の機会は、研修後のモニタリングによって、研修の成果を自分で確認した時でした。自分たちが行った研修が、住民参加による教育改善の活動に実際に結びつく様子を見て、仕事への意欲がわき、CGDES担当官としての自覚を持つようになったのです。それからの彼らの進歩には驚かされました。これで、CGDES担当官養成についてプロジェクトは一応の目途がたち、一安心しましたが、すぐ、プロジェクトの前には難題が立ち塞がりました。

#### モニタリング/支援体制確立へ第1の関門

それは、CGDES担当官一人当たりが担当するCGDESの数が最終的にとても一人で巡回して、モニタリング/支援できる数ではなくなってしまうことでした。プロジェクト開始当初のパイロット校数では、一人当たりのCGDES担当官が管轄するCGDES数は、10-30程度でしたが、対象校が増え、最終的に機能するCGDESモデルが全州に普及されると100程度になってしまいます。この一人のCGDES担当官が担当するCGDES数の超過は、国のモニタリング/支援体制を語る時に絶対に避けては通れない問題でした。巡回型はサンプル校だけにして、データ(学校活動計画やその総括表そして、モニタリングシート)等を集める体制を作るという選択肢もありました。実際にデータを集めることがモニタリング/支援体制の確立だと言っている場合もあります。しかし、CGDESの機能性を永続化するためには、問題のあるCGDESを支援したり、刺激を与えたりすることが不可欠であることが、プロジェクトの経験からわかっていました。どうすればいいのかそれがその当時、とても頭を悩ませていた事柄でした。

#### 発想の逆転、CGDES連合の誕生

頭を悩ませた末に、たどり着いたのが、巡回型ではなく集会型のモニタリング/支援体制にしたらどうかというアイデアでした。つまり、担当官が全部のCGDESに行くのが難しいなら、モニタリングされる方が集まったらどうかと発想を逆転したのです。この発想を実現すべく、プロジェクトでは、CGDESの代表が自分たちで定期的に集まり、モニタリング/支援の情報を集めることができる集会型モニタリング/支援の試行を始めました。これが、CGDESをコミュンレベルでグループ化した、のちにCGDES連合と呼ばれる組織です。CGDES連合も機能化への試行錯誤後、CGDESのモニタリングで十分な結果を残したので、モデルが国家承認され、全国普及されます。これで、第1の関門を突破します。一方、CGDES連合は成立後、モニタリングの機能だけではなく、CGDES間の経験共有により、参加CGDESに多くの刺激を与え、CGDES支援の機能も果たすようになります。また、多くの住民参加によるネットワークインターフェース組織として多くの役割を演じていきます。

## 行政のモニタリング体制

この CGDES 連合の機能化により、CGDES 担当官は年 3 回開かれる連合の総会で、コミュニケーションレベルにあるすべての CGDES モニタリング情報を得られるようになります。そのため、県にある CGDES 連合の数は平均 5～10 程度ですので、直接学校を巡回するより巡回回数が大幅に軽減され、管轄のすべての CGDES のモニタリング情報を得られるようになりました。さらにこのモニタリング情報は、州レベルで定期的に開催される CGDES 担当官会合にて州レベルの集約分析がされます。この情報は、州の CGDES 監督によって報告書または、年 2 回開催される全国モニタリング共有セミナーで中央の CGDES 調整部に集約され、分析されることがシステムとなり、体制としては完成しました。ただ、このモニタリング体制の行政の部分の問題は残っていました。

## モニタリング永続化への問題点

行政のモニタリングシステムの問題点としては、全国担当官への移動手段とその費用の確保、中央の CGDES 担当部署の強化等の大きな問題がありました。これらの問題は、世銀による CGDES モデル全国普及資金、全国の県の CGDES 担当官へのバイク供与支援があり、また、CGDES 担当官のモニタリング費、担当官会議費に関しては、見返り資金から支出できるような支援をプロジェクトが行ってきました。さらに、プロジェクトは、中央の組織が COGES 推進室から CGDES 調整部へ格上げになる支援も行っています。これらの支援により、実際にモニタリング支援が行われ、CGDES がより機能し結果を残すことによって、CGDES の役割が広く認知されるとともに、そのモニタリング体制の維持のための今回のワークショップの開催までたどり着きました。今後は、このワークショップの結論や省令案を正式に発布させ、調整部がモニタリング経費を確保することによって、モニタリング/支援体制としては必要最低限の機能を果たし続けるよう支援していきます。

## CGDES モニタリング/支援体制の経験からの教訓

このモニタリング/支援体制確立が終了したわけではないので、この経験を総括はできませんが、営々とした支援や、新しい発想で、いくつもの難題をクリアし、成功したモニタリング確立支援の優良事例であることは間違いのないでしょう。しかし、支援期間が継続的に長く、より短期間にモニタリング体制確立を目指している国に応用できるかは、今後のこの事例の分析にかかっていると思います。

(みんなの学校プロジェクトチーフアドバイザー 原雅裕)

## ニジェール国内の出来事

### ～独立記念日～

小林支所長が赴任された 8 月 3 日はニジェールの 55 回目の独立記念日でした。この日の恒例行事として、毎年ニジェール各地で行われているのが植樹です。しかし、独立記念日に植樹を行うようになったのは 1975 年、セイニ・クンチェ大統領時代のことで、この年に正式に 8 月 3 日が「植樹祭 (la Fête National de l' Arbre)」となりました。

私自身、こうした植林イベントに何度か参加したことがありますが、地元の人たちと汗を流しながらひたすらに苗木を植えた経験は、大変有意義なもので、それなりの充実感を味わうことができました。植樹祭に限ったことではありませんが、華々しい、一時限りの植樹イベントと比べると、その後の育樹過程は実に息の長い地道なケアが必要です。残念ながら植樹祭や植林イベント等で植えられた苗木の多くは、日照りや家畜、害虫などによる被害を受け、大きく育つことなく枯れてしまっているのが現実です。息の長い支援と地元の人々の協力が欠かせないという点に



おいて、植樹・育樹と国際援助・協力は非常に似ているなあ、と思いを馳せたそんな休日の昼下がりでした。

(企画調査員 佐々木夕子)